



# 立教英国学院通信

第二七六号 二〇一七年七月十六日  
発行者 立教英国学院

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND  
GUILDFORD ROAD, RUDGWICK RH12 3BE  
<http://www.rikkyo.co.uk>

## 2017 年度入学始業礼拝

春休み

高等部一年二組 遠藤 百夏

久しぶりの日本への帰国。羽田空港に降り立ち到着ゲートを出ると、すぐに家族が笑顔で迎えてくれた。私はとてもホッとした。話したいことが沢山ありすぎて、何から話していいかわからなかった。それから私は何日もかけて2ヶ月間の濃い経験を家族に話した。日本を1人で出国して学校に着くまで、緊張で張り裂けそうな心をずっと抑えていたこと。入寮して初めての1週間は慣れなくてとても辛かったこと。自分の殻をやぶって、色々なことに挑戦したり努力したりして、自分の中の何かが変わった気がしたこと。嬉しいことも悲しいことも分かち合える友達が出来たこと。辛いことも自分の成長のための試練だと受け入れられるようになったこと。そして改めて立教英国学院で高校生活を過ごしていく決意を固めたこと。私は話すことで自分の気持ち整理されて、とてもスッキリした。



私は昨年の夏休み、通っていた中学校からケンブリッジ大学語学研修プログラムに参加させて頂き、ケンブリッジ大生の思考力や人間力の高さに憧れ、そして英国に心がときめいた。その結果、私もすぐに英国で学びたいと思い、中3の3学期から立教英国学院に転入学させて頂いた。

今回は2ヶ月という時間だったけれど私は沢山の経験をし、時には涙し時には大笑いしながら大家族の中でも濃い貴重な時間を過ごせたと思う。

来学期からいよいよ高校生になる。高校生活、何に挑戦してみようか？ずっと春休み中考えていた。何事も自分から積極的に動かないと時は過ぎていくばかりで時間がもったいない。せっかく英国にいるのだから、英検などの資格取得はもちろん力を入れる。そして校外授業やホームステイなどを通して、本場の英国に触れて少しでも国際性を身につけたい。さらに、始めたばかりのバイオリンのプライベートレッスンは、これからはもっと趣味として取り組んでいきたいと考えている。それに加えて、第二外国語を新しくプライベートレッスンでとりたい。それ以外にもフライデースポーツなどを通してみんなと楽しく汗を流して青春したい。学校行事は初めてのものばかりだろうが、みんなと切磋琢磨しながら、良い思い出を沢山作るように精一杯取り組んでいきたい。

これから始まる私の高校生活！わずか三年間だけの高校生活だから。一生に一度の貴重な高校生活だから。後悔のないように、自分なりに自分らしく丁寧に、そして前向きに一生懸命と取り組んでいこうと決意した春休みであった。

### 一 目 次

ページ	ページ
2017 年度入学始業礼拝	1
立教英国学院 校長の交替	2
2017 年度第一学期行事	3
球技大会	4
Japanese Evening	5
小咄 飛行機に乗れない日のハイキング	6
ハーフトームのホームステイ	6~7
今年の生徒会の活動	8
ウィンブルドン・テニス観戦のかわりに 7月のミニ・アウトティング	9
創立 45 周年 写真で見る立教英国学院のあゆみ	10~11
第4回 チャプレンより	12
イギリス小咄 ホームステイのおじさんに聞いた話 Sunday Roast	12

## 校長交替

二〇一七年三月、第七代棟近稔校長が退任し、四月より佐藤忠博が新校長に就任しました。

棟近稔前校長は、一九七七年に立教英国学院に着任し、専門の物理のほか、高校生に数学を教えることができました。また G.C.S.E. Biology の授業でも長くチームティーチングを行い、英国人教員と共に指導にあたってきました。

長く在外教育施設として、海外子女の受け入れを行ってきた立教英国学院は、主に海外赴任の方の間で知られる学校でしたが、前任の東牧雄校長の数多くの学校訪問活動を引き継いで、棟近稔前校長の八年間にわたる広報活動の結果、立教英国学院は少しずつ認知されるようになってきました。

佐藤校長は、一九八七年から三年間立教英国学院に勤務し、二〇一四年に立教英国学院に再び数学教諭として赴任しました。小学校五年生から高校三年生までが学ぶ本校で、小学部の運営に努め、体力増進、英語力向上、小学生自身による時間の使い方、校外外出など、今までにも増してきめ細かく充実した寮生活を、小学生という年齢に合わせて作り上げてきています。

## 前校長 棟近 稔先生より

私が立教英国学院にきたのは 1977 年です。今ここで学ぶ立教生は生まれていない人ばかりですが、ちょうど 40 年になります。ちょうど赴任した年が 5 周年で、学校が誕生して 5 年でした。今年は創立 45 周年を迎えます。40 年の節目にあたり、そして校長の任期も終了しますこの節目に、退職することになりました。私の今までの 40 年間という社会人生活は、全てが立教英国学院でした。そして人生の三分の二がここ立教英国学院なのです。立教以外の生活を知らない。足腰が立つうちに立教以外の生活もしてみたいと思っています。

学校が小さいときから見守ってきて、学校がどんどん成長していくのを見て、自分自身も学校に成長させてもらって今の自分があると思っています。その間ずっと生徒の皆さんや先生方、みなさんから支えられてきて、だから今があります。それは学校も同じで、みんなが支えてきたから、今の立教があります。私は立教の制服が大好きなんです。とてもカッコいい。とても言葉では言い表せません。

3 学期になって高校 3 年生がいなくなった学期、次はどうなるかなと見ていたら、高校 2 年生が急にしっかりしてきました。高 2 の当直は走って鐘鳴らしに行きますし、食事の前も走って食事の準備の手伝いに行っていました。毎朝、今朝のベッドメイクを褒めるとき、高 2 がますます褒められるようになってきました。そういう成長と変化を見守ってこられたことがとてもうれしいことなのです。4 月から高校 2 年生をはじめとして、みんなで新たな学校を支えて行って下さい。立教英国学院をよろしくお願いします。

(2016 年度卒業終業礼拝でのスピーチより)



## 新校長挨拶



本校は、1972 年、海外で仕事をされている保護者の皆様の子弟に、キリスト教の精神と日本の文化伝統を大切に教育を、との思いから、本校初代校長、縣康先生により、設立されました。以来 45 年間、同じ場所にあり続け、成長した児童生徒たちを世界へ送り出してきました。

1987 年 3 月に大学を卒業し、社会人として初めて勤めたこの立教英国学院は、私の人生に強烈なインパクトを与えました。

私がこの学校へ初めてやってきたのは、本校が創立 15 周年を迎えた年でした。当時はインターネットなどというものがまだなかった時代です。大学の掲示板で見つけた、「立教英国学院」の文字、「英国」という漢字二文字だけが、この学校はイギリスにあるのだということを示していました。そして、学校の姿は、当時私が手にすることのできた唯一の資料、立教英国学院 10 周年のしおりに掲載されていた写真でしか知ることができませんでした。

日本から出ることも初めてだった私は、南回り、26 時間かけて到着したヒースロー空港を出て 5 分後に、ゆったりと草を食む羊たちの姿を見てまず驚きました。溢れる緑と咲き乱れる花、レンガ色の町。空港に迎えに来てくださった宇宿前校長先生の運転する車の窓から見えるもの、目の前に次々と現れるもの、何もかもが新鮮でした。憧れていた海外、というのはこういうものなのか、と、圧倒されたことを思い出します。

いよいよ新しい年度が始まり、驚きはさらに深まりました。世界各地から集まってきた児童生徒たちを迎えて、この広い、南イングランドの田園風景の中に位置するこの場所が、日本人の子供たちで溢れる様子は壮観でした。当時の児童生徒の数は、300 人を超え、食堂にテーブルが入りきらず、ステージの上にも 3 列のテーブルが置かれていました。それだけ、日本が元気で、エネルギーに満ちた時代だったのだと思います。でもその熱は、はるばるここまでやって来なくては分からないものだったのです。

私は、3 年間の勤務のあと、日本で再び教職につきましたが、日本で教職にあった間ずっと、地球の裏側で営まれている、この立教での児童生徒・教職員の共同生活のことが頭から離れませんでした。4 年前、再び立教の門を叩いたとき、懐かしさに胸が震えました。

時代は変わり、再び私の目にした立教は、以前とは変わったところもたくさんありました。児童生徒の数は、当時と比べると約半分です。日本からの、児童生徒の直接募集が棟近稔前校長の在任中に始まり、いまでは総児童生徒数の約三分の二が、直接日本からやって来ています。情報化が進み、ここ英国にいても、日本で起こること、そして世界中で起きていることは、瞬時に伝わってきます。子供たちの家庭とのやりとりも、本当に近くて便利になりました。学校の様子も、ウェブサイトで、そして学期末に頒布される DVD などでご家庭へと伝わりやすくなりました。しかし、ずっと変わらないことがあります。それは、この空気、この臭い、この熱、「立教英国学院」という学校を本当に理解していただく、分かっていたいただくのが一番である、ということです。

開校以来大切にしてきたものの中に、立教らしさがあります。と同時に、時代の要求と共に、本校には、変わらなくてはいけないこともたくさんあります。とすると、「立教は、日本でもなく、イギリスでもない」場所になりがちです。日本と英国の架け橋であらうとする開校以来の精神に則り、「立教は日本でもあり、イギリスでもある」場所として、ここにずっと、「立教英国学院」があり続けること、それが、本校を愛し、本校を懐かしく思い、本校を大切にしてくださった方々への一番の感謝と考えます。

五年後に迎える創立 50 周年、そしてその先 75 年、100 年と、未永くここに本校があり続けることができますよう、英国の方々、支えてくださる皆様には、今後とも温かいご支援をお願いいたします。



# 2017 年度第 1 学期 行事

9 日 入学始業礼拝

10 日 健康診断、新学期オリエンテーション

11 日 高等部実力テスト

17 日 特別時間割 (Easter Monday のため)  
Bluebell Walk

11 日 小中学部の授業スタート

12 日 高等部の授業スタート

22 日 球技大会

16 日 部活動・委員会紹介  
～4 月 30 日まで仮入部期間

25 日 午後ブレイク

29 日～ 高等部 3 年マーク模試の実施

4 月下旬～5 月中旬  
Pennthorpe School へ小学生・中 1・中 2 が英語学習に外出

April

1 日 土曜日の時間割 (Bank Holiday のため)

5 日 Japanese Evening

7 日 生徒会主催 Guildford Shopping

12 日 1 学期ミニ・アウトティング (高 2 以下)  
高等部 3 年記述模試の実施

20 日 高 3 希望者対象：英国の大学合同説明会へ外出

20 日 高 1 以上対象 OPEN DAY 本部・係説明会

21 日 第 75 回漢字書き取りコンクール

24 日 バレーボール部 Michael Hall 戦

5 月 27 日～6 月 4 日 ハーフターム

May

3 日 バレーボール部  
Michael Hall 戦

3 日 英語検定一次試験 (準 1 級以上)  
4 日 英語検定一次試験 (2 級以下)

9 日 女子バスケットボール部  
Woldingham School 戦

6 日 中 1・2 社会のフィールドワーク外出

11 日 サッカー部  
ロンドン社会人チーム戦

ケンブリッジ英検 FCE  
5 日 スピーキングテスト  
10 日 筆記試験

10 日 バレーボール部 Epsom Cup 戦

11 日 Ingfield Manor School Fete 剣道部が外出  
OPEN DAY フリープロジェクト企画の説明会

13 日 高 1 以上対象：立教大学説明会

18 日 漢字能力検定の実施

ケンブリッジ英検 KET & PET  
19 日 スピーキングテスト  
24 日 筆記試験

20 日 テニス部 Sussex Cup 戦

6 月 27 日～7 月 1 日 期末考査

June

2 日 英語検定二次試験

3 日 ミニ・アウトティング

4～5 日 期末テスト答案用紙返却

6 日 スクールコンサート

7 日 高 1 以上対象：立教大学統括副総長講話

8 日 終業礼拝、創立 45 周年記念礼拝  
児童・生徒帰宅

8～15 日 1 学期末のホームステイ  
高等部 3 年 難関大向け特別補習

July



# 球技大会

4月22日土曜日、気持ちの良い青空のもと、立教英国学院では球技大会が開催されました。児童生徒たちはこの日までそれぞれの競技ごとに一生懸命練習してきました。また新入生にとってはこれが初めての学校行事とあって、皆気合は十分です。今年はオレンジチームとバイオレットチームの二色で戦いました。

バスケットボール、バレーボール、ネットボール、サッカー、ドッジボール、ポートボール、キックベース、ソフトボールの各競技戦では、選手たちが練習の成果を見せようと激戦を繰り広げ、抱き合いながら



歓喜の声を上げたり、皆で悔し涙を浮かべたり、様々なドラマが生まれました。午前の全体競技、午後の応援合戦や綱引きなどでも、それぞれのチームが力を合わせて頑張りました。結果はオレンジチームの勝利となりましたが、どちらのチームも一丸となって戦い、どの生徒も最後までやり切ったという清々しい顔で閉会式を終えることができました。

この球技大会を通して、学年・男女を超えた交流が更に深まったことでしょう。新入生も一気に学校に馴染んだように思えます。この日の経験を糧に、これからの一年を充実した楽しいものにしてほしいと思います。



## 試合からのプレゼン

中学部二年 野口 絵子

「ピッ」始まりの合図と共に宙に舞いあがったボール。みんなの視線が一気にそこに集中した。

昨年に引き続き、2回目のポートボール。けれど、昨年とは1つ違うことがある。新入生としてではなく、在校生としての球技大会なのだ。先輩から教えてもらうのではなく、自分が教える。そう思うと、なんだかちよつとうれしかった。

初日の練習は、自己紹介で始まった。その次にちよつとしたボール慣れ。そして、最後に雑談だ。雑談をすることで一気に仲を深めて、初日の練習は終わる。雑談が結構楽しくて20分ほど話していた。そのおかげで、新入生のことをよく知ることができたと思う。

次の日の練習は、相手の名前を呼んでパスする練習をした。この練習は、みんなの名前をおぼえるためのものでもある。最初は、名前をきいてパスしていたが、途中からはみんな名前をきかないでパスできるようになっていた。

それからの練習は、チームに分けておこなう事になった。ドリブル練習とパス練習をして、雑談。これは、自分のチームの人と仲を深めるためのものである。これでもう、完璧に仲が良くなったといえるようになっただろう。

その後は、チーム対抗の練習試合をした。バス練習・ドリブル練習しながら作戦を立てたりした。そのようにして仲を深めながらの練習を毎日していくうちに時間はどんどん過ぎていき、ついには前夜祭になっていた。前夜祭では一人一人の名前を呼ばれてTシャツを渡された。最後に、みんな片手にTシャツを握りしめ、円陣を組んだけけ声をかけ、前夜祭は終わった。

「ピッ」始まりの合図と共に宙に舞いあがったボール。みんなの視線が一気にそこ



に集中した。試合開始だ。午前の部での試合。前半は、勢いをつけて点数をたくさんとった。が、後半は相手にまさかの逆転をされてしまい、敗北。その後、午後の試合にむけて作戦を練り直した。その作戦は、午前の部とは違い、私がゴールをするようになった。ボールを受け取れるか不安な気持ちを残したまま時間は過ぎていき、午後の部に。あつという間に試合は始まり、私は椅子の上に立ってボールを待っていた。すると、私の名前を呼ぶ声と一緒にボールが飛んできた。気づいたら、先輩からの力強いボールを手持っていた。ボールを受け取ることでできた時のうれしさ、それは昨年に味わうことのなかったものだった。私はその時に、今まで知らなかった試合での別のうれしさを知ることができた。結果は負けだったけれど、この試合から素敵なプレゼン트를もらったので、良い試合だったと思う。

人によつて、このうれしさを感じる時は違うと思うけれど、きつと誰だつてこのうれしさを感じる時は来る。その時が、その事にハマる瞬間じゃないだろうか。



# Japanese Evening



5月5日金曜日の夜、Japanese Evening が行われました。これは地域の方々をご招待して、日本の文化を紹介する機会として行われ、今年で13年目を迎える行事です。

今年も90名近い方が会場に足を運んでくださり、この日のために準備してきた児童生徒たちもとても嬉しそうです。



日本を紹介するプレゼンテーションで始まり、琴の演奏、剣道のデモンストレーション、茶室での茶道の実演、盆踊り、箸の体験、折り紙、昔あそび、書道、あやとり、そろばんとフラッシュ暗算の各企画でも児童・生徒が一生懸命英語で説明をしている姿が印象的でした。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、多くのお客様が笑顔で会場を後にしましたが、児童生徒も達成感に満ち溢れた表情をしていました。



英語で自分の国の文化を発信するということは、立教英国学院にいるからこそできる特別な体験の一つです。特に、新入生にとっては直接自分の言葉でコミュニケーションを取る楽しさを感じることできた最初の機会でした。このようなチャンスを生かして、異国の文化を理解し、自分の国の文化を発信できる、グローバルな人材に成長して欲しいと願っています。

# ハーフタームのホームステイ

27.05~04.06.2017

僕の誕生日だったので、何とビクトリアケーキをごちそうしてくれた。さらにサッカーボールもプレゼントしてくれた。とてもうれしかった。感動した。  
(中2男子)

ホストファミリーによって何をするとかどんなことを学べたか違うと思うけれど、やはり自分次第でいろいろなことが変わるんだと学びました。  
(高1 女子)

このおうちでは3年間で2回お世話になり、アップルデイや手紙のやり取りなど、交流を続けることができた。ホストファミリー、家、共にすばらしい。  
(高3女子)

結婚式、ホームステイ先のお子さんのプール大会の応援、いろいろと出かけた。2回目のホームステイだったから、もっと親しくなった。家族みんなやさしい方だった。また行きたい。  
(中3男子)

今年のハーフタームは全校の三分の二以上の生徒がホームステイを希望しました。ホストとなる受け入れ家庭の数が不足してしまい、残念ながらお断りする希望者もあり、申し訳ないことになりました。一方で、ステイを体験した児童・生徒たちはホストファミリーと良き時間を過ごしたようです。どのようにして触れ合ったらいいいのか分からなかったり、英語が通じなかったり、いいことばかりではなかったようですが、頑張って英語を話し、時には言葉だけではなく、身振り手振りで、表情、感情表現、一緒にスポーツなどで過ごすひとときを楽しんだようです。アンケートのコメントや作文から、児童・生徒の感想をご紹介します。



一週間本当に楽しかったです！イギリスの方の家に住んで、その方々の文化を直接知るだけでなく、より自立した生活が送れてよかったです。  
(高1女子)

昼は扉を開ける習慣を学んだ。(中2男子)

ホームステイ中には、「ありがとうございます」や「おねがいします」など一つ一つの言葉が大切になるのだと思いました。(中1女子)

「よし、ハイキングをしよう！天気がいいからお昼は外でピクニックだ。」  
フライトまで学校で過ごすことになった児童・生徒たちを誘って、有志の先生たちがハイキングを計画。目標は「ゴダウエ」午前10時出発。途中でサンドイッチを買って、車で麓まで行って、さあ歩くぞ。季節もよし。天候もよし。丘からの眺めもよし。なんて、気持ちのよい一日！初夏の丘歩きは最高です。



「大変だったね。」  
学校に帰ってきてすぐ夕食。二日後の便に振り替えになっている者、まだ振り替え便がとれない者と様々。せつかくのハーフタームなのになあ！翌日の日曜日は空白の一日になってしまいました。

「BAの世界中のシステムがダウンしてしまったのが原因のようです。」  
徐々に状況が分かってくると、保護者の方と連絡を取り合いながら、他の航空会社の便を確保。何人かは目的地に飛びましたが、フランス、ドイツ、日本に帰宅予定だった七人の児童・生徒が学校に戻って来ました。

十三時五分。  
空港送迎の先生から入った一本の電話。  
「プリティツシユ・エアウェイズの便が全てキャンセルになっていようです。」  
「なんですと？！ハーフタームで自宅に帰宅する児童・生徒たちは、突然のトラブルに巻き込まれました。」

## ハイキング！

『飛行機に乗れない…』



「あつ、ワラビ！」山菜採りも楽しい。「あげるよ」と、ワラビに目がない先生のもとにどんどん集まるワラビ。  
「これフリント？」  
授業で習った石器材料の石探しに勤しむ者あり。

「もう少しで目的の頂上。さあ、丘の上まで競争だーっ」  
と元気よく走って振り返ると、ゆったり歩いている生徒たちの姿。あれっ？  
「僕たち疲れました…」  
見晴らしのよい丘の上でサンドイッチを食べて、午後もどんどこ歩く。やがて丘の合間の村に到着。一日すっかり歩いて、村のお店でアイスクリームを食べて少し休憩。一日中ハイキングをして、帰りは疲れた足を川で冷やして、気持ちよく疲れて帰ってきました。思わぬトラブルに、思わぬ素敵な一日を過ごしました。



やはり、単語を知っていても、とっさになると出て来なくなったりするので、会話は大変だなと思いました。でも「話そう」という意味があれば相手もそれに答えてくれるのだなとしみじみ思いました。(高3女子)

簡単な内容を伝えるのにも、言葉に詰まってしまい、遠回しな言い方をすることが何度かあった。このことをバネにして、英語の勉強をもっとしっかりやろうと思った。(高1女子)

英語の授業よりも実用的な英語をたくさん使った。(高2女子)

家族の方の言っている事は分かっていても、自分の言いたいことが言えなくて困った。(中3女子)

役に立つ会話表現を教えてもらった。(中3女子)

あまり英語が上手くなくても、伝えようと頑張れたし、伝えることに気がつけた。(高1女子)

ホストファミリーが英語について学習することに協力してくれたところもあり、Speaking が上達したと思います。様々な観光地に行ったので、英語の情報と共に文化・歴史を学びました。(高3男子)



夜は毎日ティータイムがあり、ホームステイ先の人と一緒にゲームをした。このように家族との時間を大切にすることを文化を感じた。(高2男子)

英語が伝わらない時が多々あり、一年後の自分の英語が少し気になってきた。(高1男子)

ホストファミリーと食後にスクラブルをした。スクラブル楽しい！(高3男子)



毎日みんなでゲームを夜にした。(高1男子)



一緒にガーデニング。蜂の巣を見に行く。海へ出かける。棒たおしゲーム。犬の散歩。丘へ出かける。日本食を作った。鶏の卵を取りに行き報告。よく喋った。(高3男子)

毎日、外出の予定をつくってくれた。車を出して連れて行ってくれた。この移動中に会話を楽しんだ。(高1女子)



お寿司をつくってもらったり、ぎょうざを作ったりしました。(高3女子)

ホストファミリーと一緒に料理をして、たくさん話した。(中1女子)

一緒にごはんを食べた。おばあちゃんの誕生日パーティー。クラムレーに行った。バーベキューをした。美術館に行った。(高1女子)



お料理が好きで、得意な Host Father が毎食すばらしい食事やデザートを沢山作っていただきました。(高3女子)

寿司、ケーキを一緒につくった。(中3女子)

2日目はギルフォードに買い物に行った。…単品の何かを作りたいかったので、トマトとチーズ、クラッカーを買って、トマト&モッツァレラと、クリームチーズとクラッカーを作り、夕食に添えた。(中2男子)



料理が全て手作りで、おいしすぎて太った。(高3女子)

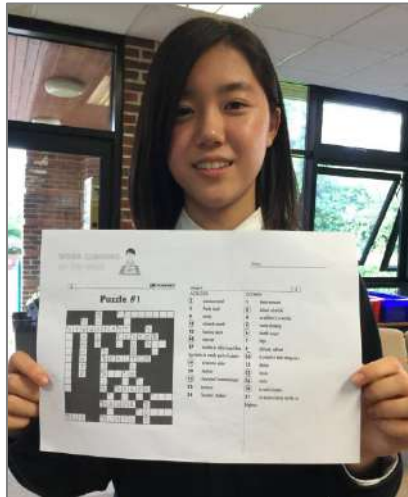
## ブレイクのクッキーをきれいに食べよう！啓発ポスター

僕は5年前の春、立教英国学院に入学しました。当時から NEWHALL の壁に貼ってあった「クッキーはきれいに食べましょう。」というポスターは今にも剥がれそうな状態で、さらにはクッキーのかげらなどが床に散らばっていることが多かったため、新しいポスターを作り改善しようと考えました。

ただのポスターを作るだけでは形だけで終わってしまうと思ったので、生徒の心に響くようなものを作り設置しました。

するとその日から生徒みなさんのブレイクの使い方がガラッと変わり、きれいな状態を保つことができています。

生徒会会長（高等部2年）



## Word Climbing さあ、立教生よ挑戦！

"Word Climbing"は英語のクロスワードパズルとワードサーチを毎週交互に生徒に解いてもらうという取り組みです。始めた理由は、生徒が遊び感覚で気軽に楽しみ、それに加えて単語力の向上にも繋がるからです！一学期の計6回の全てに取り組んでくれた生徒がかなり多くてとても嬉しかったです◎

生徒会高等部副会長（高等部2年）

# 今年の生徒会の活動 第45代生徒会

## 先生 GPS

僕が生徒会に立候補する時に、一番の公約として掲げたのがこの先生 GPS です。

これは生徒が放課後、または夜の自習時間に先生に質問をする際に、先生の居場所をホワイトボードに貼ってあるマグネットで示し、より効率良く質問を出来るようにするために設置しました。

また先生方が置くマグネットの色で先生に質問が可能かどうかを区別できるようにしています。

まだ試験運用なので改善点もありますが、来学期には完成版を作っていきたいと思っています。

完成版に乞うご期待！

生徒会高等部副会長（高等部2年）



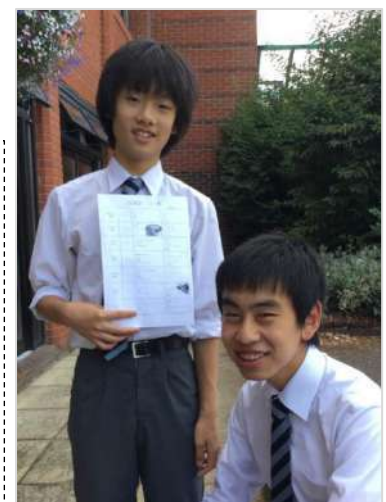
## 日本語メニュー表

これまで、立教英国学院では1週間の食事のメニュー表が英語で発行されてきました。これでは、わかりにくい人がいるという事があったため、そのメニュー表を日本語訳して発行すれば、かなりわかりやすくなると思い、日本語メニュー表を始めました。それ以外にも日本語訳してもわかりにくいメニューは、写真を添えて発行することによりわかりやすくなりました。

しかし、まだ課題もあります。メニューの日本語訳が難しいことがあるので、そこを改善していきたいと思っています。

生徒会小中学部副会長（中学部2年）

生徒会小中学部副会長（中学部2年）







ウィンブルドンテニス観戦のかわりに…

## 7月のミニ・アウティング



期末試験明けの七月三日は、ウィンブルドンで行われるテニス大会の観戦を予定していました。今年は英国の情勢を鑑みて、残念ながら観戦をキャンセル。その代わりに、訪問先を慎重に選びながら、ミニ・アウティングが組まれました。高三はArundelとWorthingの街でお昼は飲茶を楽しみ、高二もWorthingへ、高一はThorpe Parkという遊園地で一日をゆつくりと過ごしました。中学生はSeven Sistersハイキングに、小学生はFishers Adventure Farm Parkへ遊びに行きました。曇りがちながらも、すばらしい青空もぞき、学期末のひとときを過ごしました。翌日から、中高生は期末テスト返却でした。





# 創立四十五周年 写真で見る

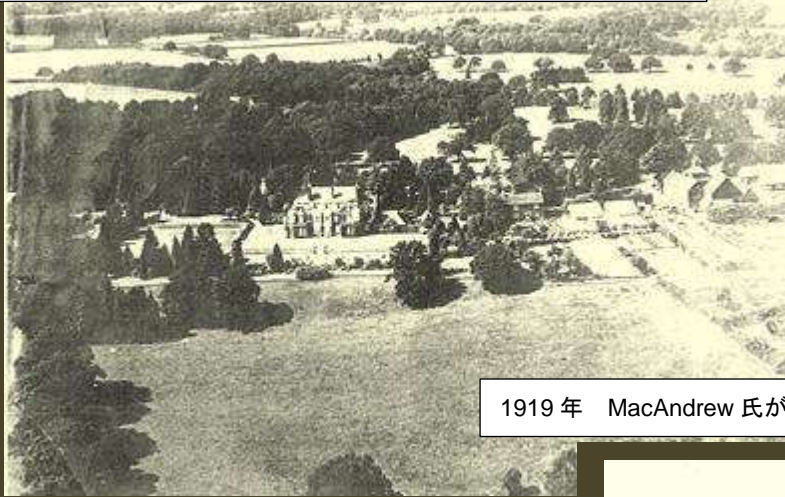
## 立教英国学院のあゆみ

### 前編

※全三編の予定です

二〇一七年の今年、立教英国学院は、創立四十五周年を迎えました。一九七二年に海外の日本人学校として開校した本校は、たくさんの方に支えられて今日の日を迎えています。七月八日の終業礼拝では、創立四十五周年を記念する礼拝を捧げました。四十五年の間に少しずつ変化が訪れましたが、今も変わらないものもあります。ここでは、全三回にわたって、二〇〇六年に当時の中学部一年生がオープンデーで行った展示企画の資料を基にしながら、立教英国学院の四十五年間を写真で振り返ってみようと思います。

1903年 ドイツ出身の実業家 Shumacker 氏によって本館が完成



1919年 MacAndrew 氏が買い取って邸宅として使用



1960年代 ホテルとして営業

#### PALLINGHURST HOTEL

RUDGWICK, Nr. MORSHAM, SUSSEX  
Telephone: Rudgwick 416. Guests 132.

The Hotel is situated mid-way between Guildford and Morsham. Whilst the entrance drive is directly off the main road, the Hotel stands well back from the road in 16 acres of its own ground.

Frequent trains run from London to Morsham or Guildford where trains to Baysards Station are available. A phone call from Baysards will bring you a car.

Buses pass the entrance at each hour.

#### TERMS:

Sing: from 10 guineas weekly.

Dodge: from 10 guineas weekly.

Breakfast: Lunch Dinner

Bed and Breakfast from 25/-

Other meals by arrangement



昭和46(1971)年の産経新聞より。



*founded in 1972*



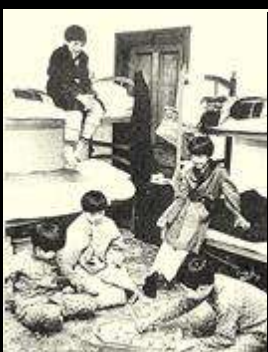


この教室はどこでしょう？  
木製の机は今も教室で、椅子はチャペルで使っています。

## 本館を中心とした生活



テーブルマナーを守って  
食事。



ドミトリーで。  
ガウンを着る習慣は今も



これは新館の一室。パイプベッドは軍からの払い下げ品でした。



ティーブレイクの様子



スクールショップの様子



## チャプレンより

## 第4回



立教英国学院の学校付き  
牧師さまです。礼拝や  
聖書の授業ではさ  
まざまなお話をし  
ています。

学期末毎に児童・生徒の皆さんには、聖書の授業や日々の礼拝の説教、また英国に住むことを通じて感じたこと、考えたことを作文として書いてもらっています。今学期、やはり多かったのはテロというテーマでした。

英国内また世界における貧困と格差の問題、宗教的な問題、民族的な問題など、様々なレイヤーが複雑に絡まり合っている現代は、単純に一つの理由で解きほぐすことは困難です。

授業でも度々伝えるのですが、何かの出来事に対して私達はついわかりやすい理由を求めてしまいます。人間は何かに対して納得し、安心したいという欲望を持っているからです。そのような物の見方はしばしば現実というものから私達を遠ざけるものでもあります。

また、何か一つの原因のみを確立してしまうと、そこに対立軸ができてしまい、貧困であったり、文化であったりするわけですが、宗教間の対立や、貧富の社会層の対立、文化の対立は生み出すべきではありません。大切なのは、普段の人間関係でもそうであるように、何か一つの原因に単純化するのではなく、他者を他者として尊重し、総合的に生身の人間として関わりを持ち続けるという態度そのものではないでしょうか。

それは時に困難を伴いますが、今、多く

の英国民がその態度を保とうとしています。王室や国教会の聖職者たちがモスクへ足を伸ばし、共に祈る姿を見ているのが象徴的です。それは隣人を愛するあり方だからです。



そのような英国に児童・生徒達は住んでいますから、他者を他者として捉える、ということへの感度は自然と深まります。今学期末の作文では、「死者や遺族を思い祈る時間が増えた」「このようなテロが起きたからといって、英国内のイスラム教徒を差別するのは良くない。偏見の目が広まらなければよいのだが」といった他者を思いやる気持ちや、未来への危機が綴られています。

これはとても心強いものです。

この心強さの裏には、自分たちが英国において外国人として生きている、という自覚が作用しているのでしょう。異なる文化的出自を持つ自分たちが、その文化を尊重された上で、大切な隣人として受け入れられている、これは大きな事です。

聖書の中で、有名な善きサマリヤ人のたとえ、というイエス様がされたたとえ話が

あります。(ルカによる福音書 10章 25・37節) 旅の途中、とあるユダヤの人が強盗に遭い、身ぐるみを剥がされ行き倒れてしまっています。通りかかった同じユダヤの人々は、自分も厄介ごとに巻き込まれたくないため、見て見ぬふりをして通り過ぎます。

しかし、当時対立していたはずのサマリヤ人の男が、その彼を手厚く看病し近くのユダヤの町の宿屋へ連れて行きます。これは大変な勇気のいることでした。何故なら、サマリヤ人はユダヤ人と敵対していたため、ユダヤの町へ行くということは殺される危険があったからです。

このたとえの最後にイエス様は尋ねます。「誰が追いはぎに襲われた人の隣人となつたと思うか」。律法の専門家は答えます。「その人を助けた人です」。そこで、イエスはこう言われます。「行つて、あなたも同じようにしなさい」。

自分が隣人として大切にされていることを知ること、自分もまた出会った人の隣人となっていくということ、愛するということ。



4月に、福島寛美先生(国語)、関口萌先生(英語)、佐藤智花先生(保健室)が着任されました。よろしくお願いします。



7月に、Mrs Beeney, Mrs Cavaillon, Ms Stantonが離任されました。いままでも難うございました。

## イギリス小咄



## ホームステイ先のおじさんに聞いた話

## 日曜日の料理 Sunday Roast

Sunday Roast とは、日曜日の昼食に供されるローストした肉のこと。チキンのローストだったり、ポークだったり、ビーフだったりする。ポークやビーフの時は、薄くスライスされる。ロースト・ビーフのイメージだ。

日曜日は、教会から帰ってから家族みんなでサンデーローストを食べるが、昔はその後、月曜、火曜と同じものを食べた。水曜はまだ残っているかたまりでシチューを作って食べる。木曜はもうカスしか残っていないので、それでシェファーズパイやコッテージパイを作って食べる。だから、イギリス人は金曜日には魚を食べる、と言っていた。

(数学の先生がむかしホームステイをしていたファミリーから耳にしたお話)

立教英国学院通信の電子配信への切り替えにご協力下さい。ご意見、ご感想もこちらへどうぞ。

infodept@rikkyo.w-sussex.sch.uk